

佛の塔

大智那



道伯



紙の城

再建篇

那智大介

経済往来社

〔著者略歴〕

那智大介（なち・だいすけ）

大正4年，和歌山県に生る。

元，石油会社取締役。

現在，某一流会社代表取締役。

紙の城——再建篇—— 定価 一〇〇〇円

昭和五十年九月五日 初版発行
昭和五十年九月三十日 第九版発行

著者 那 智 大 介

発行者 下 村 亮 一

発行所 株式会社経済往来社

東京都新宿区四谷四丁目十一番地

電話（三五七）〇八一一番

☆検印省略

印刷 新灯印刷株式会社
製本 誠製本株式会社

紙
の
城

再
建
篇

上海からの引揚船LSTは、雨の中に墨絵のような島影を浮かびあがらせている博多湾にはいった。村上は博多第一棧橋から下船し、敗残の祖国の土をひさびさに踏みしめた引揚者一行と共に、引揚援護局の職員に引率されて、そろそろと港内に設けられてある検疫所に向った。

道々、誰ひとり職員の説明に耳をかたむけているものはなかった。日本の国は破れても美しい山河はもとの通りだった。港をとりまく山や河や緑の樹々、黒い瓦屋根に、戦前の祖国があった。街はかなり戦災をうけている模様であったが、波止場近くの一軒の民家に小さい鯉のぼりが一つ、強い風に吹きちぎられるようになびいている。村上はその一つの鯉のぼりに強烈な感動をうけ、しばらく目をはなすことができなかった。

検疫室でDDTの白い粉末をやたらに振りかけられて消毒をおわると、入国手続きなどの煩瑣な事務がつづき、一人千円の引揚金を下付されて、村上たちは博多駅近くの寺にはいった。ここが引揚者の宿舎である。

寺の夕食はいかにも粗末でまずかった。脆くて握るとぼろぼろと落ちてくだける二個の雑穀の

握り飯、まっくらな塩味のひじき、具のない一碗の薄い味噌汁がすべてであった。

引揚者は年輩の人が多かった。村上のかたわらには、船の中からずっと一緒だった多々羅一紀の家族がすわっていた。多々羅は、関西銀行の上海支店次長で、村上は日本人クラブなどでときどき顔を合わしていたが、親しいあいだではなかった。日本人料亭でも、多々羅の評判はあまりよくなかったし、なんとなく虫が好かなかった。しかし、おなじ引揚船に乗りあわせた同胞として、村上は多々羅の家族と、かなり親しくなっていた。将来、この多々羅と運命的な対決をすることになるとは、両者とも思い及ばなかった。

多々羅夫人は若くて美しかった。それよりも、八歳の長男をかしらに、幼い二人の女の子があつて、よく村上になつた。村上も次第に多々羅の子をかわいく思うようになったが、なかでも長男は、上海で亡くした海平によく似て、笑顔を見ると胸が痛んだ。

子どもには、夕食は口に合わぬようだった。食べようとした握り飯がぐぐぐ落ちて落ちると、長男はくやしがつて泣いた。それにつられて、幼い妹たちも泣きじゃくつて、食べようとしなかった。多々羅夫妻がおろおろして、子どもたちをなだめすかしているのを見ると、村上はそぞろに立ちあがつた。子どもだけではない。おとなたちも、みんな不満そうな顔をしている。

無断外出は禁じられていたが、村上はひそかに寺をぬけだした。潮のにおいのする掘割りの側

に、焼残りの木材に焼けトタンの屋根を載せたヤミ市の店がならんでいた。村上は赤ちやうちんを提げた比較的小ぎれいな店をみつめて飛びこんだ。下付されたばかりの千円のなかから、三枚の百円紙幣をつかみとって、安酒一升とおでん一包みを手に入れた。それから別の店で、子どものための蒸しパンを一包み買いこみ、胸をふくらませて寺へもどった。

「盛男君、亜紀子ちゃん、奈津ちゃん、ほら、おじさんのご馳走だ」

村上は子どもたちの名を呼び、多々羅の前に一升壺と包みをさしだした。子どもたちは無邪気に目がかがやかし、喚声をあげた。村上はまぶたが熱くなった。死んだわが子が偲ばれた。

はしゃぐ子どもたちの動作を、夫人の小鶴ははずかしそうにたしなめた。しかし、多々羅は白哲の冷たい顔で村上の顔を見上げ、

「やあ、すみません。どこに売ってましたか。酒までとは、豪勢ですなあ」
と、嘯くように呟いた。

村上は遠慮している小鶴にも磊落な顔ですすめ、眼をほそめて蒸しパンやおでんの竹輪を食べはじめた子どもたちを眺めた。そして、寝る準備をしている親しい連中に声をかけた。

「ここへ、いらっしやいませんか。こういう奴を手に入れましたよ」

村上は一升壺をもちあげた。七、八人が湯呑みを持って集ってきた。

「こりゃ、大へんなご馳走ですなあ。遠慮なくいただきますよ」

こう言ったのは、日本有数の商社三友物産の支店長、稲村藤太郎であった。上陸第一夜は村上の機転で、たのしい酒盛りがはじまった。話は、帰還後の連絡や、助け合いの方法などについて、花が咲いた。いっぱいの冷酒で顔を真赤にした多々羅が、しきりに三友物産の稲村に阿諛したものの言いかたをしているのが村上の気になった。が、満腹した子どもたちが小鶴のやさしい手のうちで、もう眠りに入っているのをみると、自然に微笑があふれてくるのだった。

翌日、村上たちは博多駅の臨時特別列車乗場の引込線から、数百名の引揚者とともに列車に乗りこんだ。多々羅の家族とは大阪駅でわかれた。稲村も去っていった。

村上は難波駅からさらに乗り継いで、田辺経由の紀南に向う列車の人となり、新宮市へ着いたのは夜の十時をすぎていた。母の小杉、妹の民江、亡妻美和の父幸次郎と母ことめ、広の姉の奈美枝とその夫信太郎たちが迎えに出ていた。

新宮には姉夫妻の家と、母、妹の仮の寓居があった。村上は当分母の家に落ちつくことになり、美和や子どもたちの葬式をすませた。葬儀には上海でわかれた小淵が四国から駆けつけた。

一週間ののち、村上は上海から持ちかえった書類をたずさえ、小淵を従えて上京した。大亜石油の本社を訪ねるためである。

東京駅には田村夫妻が迎えに出ていた。小淵からの連絡でかけつけたとのことだった。田村は帰国後、本社の冷めたい仕打ちに腹を立て、辞表をたたきつけると、妻の富子とともに下谷の露地裏で、小さい豆腐屋を営んでいた。その夜は、田村宅に泊ったが、村上は会社の現状をきいて失望した。

海軍の指定工場だった大亜石油の諸工場は、ことごとく徹底的な爆撃をうけて潰滅した。一時は三千人を超えていた社員も、いまは十分の一くらいしか残っていなかった。その社員も籍はあっても仕事はないというありさまで、みんなうろろしているとのことであった。

それを一応頭に入れておいて、翌朝、村上は小淵をともなつて、青山の本社へ向った。

そこは一面の廃墟で、ぼつんぼつんとバラックが建っていた。見当をつけて行つたが、本社のあるかはわからなかった。東京は予想以上に変わり果てていた。

たずねたずね、迷いに迷い、やっとさがしあてた場所に、安っぽい十坪くらいのバラックが建っていた。まちがいなく、「大亜石油株式会社」の木の表札がかかっている。表の硝子戸から内部を窺うと、うすぐらい部屋に人影もなかった。村上と小淵は言葉もなく、しばらく狐につままれたような顔つきで立っていた。

休業かな、と不審に思いながら、硝子戸に手をかけると鍵はかかっていた。滑りこんで

奥へ声をかけると、戦闘帽をかぶり、工員服を着た警備員らしい二人の男があらわれて、怪訝そうに二人をみつめた。

「ここが大亜の本社ですか」

「そうです。なにか御用で？」

「ぼくたちは上海から引揚げてきた支店のものですが、社長に面会したいのです」

小淵が言うと、警備員は二人の名前をきき、奥へ引っこんだ。まもなく出てきて言った。

「ご案内します。どうぞ」

机を三脚ほど置いた部屋の突きあたりに、大きな硝子戸があった。それをあけると、地下へ降りる四メートル巾ほどの練瓦を敷きつめた道がついていた。降り切ったところに、本社事務所があった。戦時中、防空壕兼事務所にしていた場所が、事務所の焼失で、防空壕をそのまま事務所に使用しているわけだった。

戦後、採光のため防空壕の天井に穴をあけたものだろう。一条の明りがぼんやり室内にさしこんでいた。昏い陰鬱な気がただよい、粗末な机がならべてあった。四、五十人の社員の影がぼんやりすわっているようにみえた。村上は昔栄えた大亜石油の亡霊をみたように思った。

顔みしりの小室取締役が隣室から出てきた。すぐ村上がわかったらしく、

「よう、お帰りなさい。ご苦労さん。こちらへどうぞ。いま重役会議中なんですがね、ご案内しましょう」

と、にこにこして言った。

隣室は採光もかなりよく、がっしりした丸テーブルが室の中央に据えられてあり、五人の重役が席についていた。村上の顔みしりは、小室のほか、山口常務ただ一人で、あとは誰も知らなかった。部屋の片すみに粗末な木のわくで仕切った場所があり、机が一つだけ壁に沿って据えられてあった。たぶん社長机なのであろう。

小室の紹介で、村上は一同に向って帰国の挨拶をした。

「失礼ですが、社長は」

村上は單刀直入にたずねた。海軍退役軍人で人格識見ともに立派な人物と定評のある内田社長に逢いたいと思ったのだ。

「内田閣下は、一昨日お辞めになったばかりです。残念でしたが……」

山口常務は言った。

「後は、支倉専務が社長に就任と決まりましたね、目下、社長は挨拶まわりをしておられます」
村上はがっかりした。

しかし、自分の抱えている問題は、社長にわかってもらえたとしても、一応、重役会にかけられるだろう。ここで端的に話しておくのも無駄ではあるまい、と村上は考えた。そこで小淵に命じ、早速、上海支店資産接収書を出させて、山口常務の前に差し送った。山口は黒表紙の書類をうけとると、ペラペラと頁をめくり、ところどころ視線を強めて点検した。

この書類でどのような苦勞をしたか、村上はよほど力説しようと思ったかしのれない。言うて涙が出そうなので、じっと我慢した。山口は簡単にうなずくと、

「勿体ないことをしたが、仕方ないさ。こんなもの役に立たぬ」
と言った。

村上はくらくらとした。目のくらむような憤りが心内からふぎだした。

「役に立たんとは何ですか。これが役に立たぬのですか」

村上は山口の目をききと見据え、叫ぶように言った。山口は村上の権幕にどぎもをぬかれたようだった。

「ま、待ちなさい。……いや、村上君には悪いがね、いまの日本では理屈は通らんだ。君、日本は被占領国なんだぜ」

山口常務には、村上を傷つける意志は毛頭もないことは、村上には十分理解できたが、それで

は、戦後の会社に対する忠誠心と言うものはすべて零なのか、自分は悲しいピエロなのかと思うと、胸の中から熱いものがこみ上げてくるのを感じた。

「無駄ですか。じゃ、それを返して下さい。私は私の馬鹿正直の記念碑として、それを死ぬまで保管したいと思いますから」

と静かに言った。美和の骨箱の下にこれを入れて、燈明を灯した母の姿が目に見えた。

「まあ、そう興奮しないで。いや、君の努力はわかるよ。しかし、こっちだって努力はしたし、苦勞の連続なんだ。君たち、上海で旨いものが食べられただけでも、よかったと思うんだね。東京じゃね、君……」

と慰めるように言った。その言葉はますます村上を激怒させた。

「一つお願いがあります」

村上は蒼い顔をして静かに切り出した。

「上海支店から引き揚げた社員の復帰をおねがいたいです。復帰できないものには、退職金のお支払いを願いたい。その理由は……」

と言って、永々と戦後のインフレ状況、それによる社員の困窮、そして彼の帰国を待ち望んで手紙をよこし、彼を尋ねて来た上海支店社員の状況を話し続けた。全重役は耳を傾けている。す

でにこの種の陳情は、何回か本社宛になされているらしい。彼等は困りはて、村上課長が帰って真相を訊いてから、と引揚社員に答え、一時逃れをしているらしかった。

「それはですね、村上さん」

と、村上の訴えをきいてから、小室総務部長が口をさしはさんだ。

「貴君は八月中旬ごろの電報で、小淵、田村の両君以外は、支店全員に退職金を支払ったと言つて来たではないですか。それは現地で円満退職したことになるんでしょう」

「なるほど退職金は出しました。しかし、その金は海軍から得たもので、会社の金は一文も使っておりません。その金も紙屑同然となったのです。引揚者は無一文の丸裸同然で帰国し、援護局から一率に千円を支給されているだけです。このインフレにみんな困っていると思います」

「お困りはわかりますが、上海の人たちは人数が多いのでね」

と、おどおどしながら、村上に媚びるように語った。

村上は、上海から引揚げて来た連中の得手勝手な言い方にも、いささか腹を立てていたが、帰るまでの実情を知れば、そう腹も立てていられない。会社の言い分は言い分だが、すべて村上の電報に責任を押しつけ、村上が海軍から得てきた退職金については触れようもしない。その点、会社に対して無性に腹が立った。

「どこの会社でも、元の社員が集り、一緒に粥をすすっても再建しようと努力するのが当然だと思います。にべもなく貴方たちは断るつもりらしいが、人情というものがないのですか！」

村上の声は大きくなった。小室は首をすくめた。山口だけ口のなかで何かぶつぶつ言っている以外は、みんな脅迫でもうけているような気まずい顔で黙りこんでいた。やがて、年配の技術家佐藤博士が、とりなし顔で言った。

「まあ、まあ、まあ。……いや、村上君の言い分もわかりますよ。本日は社長もいないことだし、あとは重役会にまかせなさい。そして、明朝このくらいの時間に、もう一度出向いてもらいますか。新社長からお話があるでしょうし。わるいようにはしないから。……どうです、皆さん」

穏健な博士の言葉に、重役一同は頷いた。村上も、そう言われては、おとなしくひきさがるようなかった。

翌日、村上は約束どおり、もう一度大亜石油本社をおとずれた。支倉新社長は、背の低いがっしりと太った体を、それが癖の前かがみの姿勢で、大きな肘掛椅子にすわっていた。村上は山口常務の案内で、社長席へ近づいていった。

「村上君だね。うむ。山口君から話はきいている」

村上が初対面の挨拶をすると、支倉はシミのある扁平な赫ら顔をあげて言った。分厚い大きな

唇が、傲岸な印象を村上にあたえた。

村上は大阪から上海支店へ直接転勤赴任した関係上、支倉に逢ったことがなかった。なかなかのやり手であることは、うわさで聞き知っている。大亜石油の創立者で先々代社長の山村剛造を追いだしたのは、ほかでもない、支倉だということも耳にはいつていた。油断のならない人物だが、太っ腹の、意外に話のわかる男ではあるまいか、と村上は内心期待していた。

「社長。では説明させていただきます」

「それには及ばぬ。山口君からすべてを聞いた。君、誤解しちゃ困る」

はじめから支倉の語気はするどかった。

「君とか、君の部下の、なんとか言ったなあ……そうだ、小淵と田村か。君たちをクビにすると言ってるんじゃない。君自身が上海から電報で知らせてきたとおりに会社は実施しているだけだ。それを君、あとから、いまになってだよ、不当な要求をされても困る。君はむしろ、会社に協力すべきじゃないのかい？ 退職金なんて、とんでもない」

村上は血が引いてゆくのがわかった。もはや言葉も出なかった。

「村上君。君のことは、ちゃんと考えているんだよ。君の地位、ポスト、給与等については、山口君からききたまえ。今後、君には頑張ってもらわなくちゃあね。うん……これはありがたい。」